

詩篇101篇

0 ダビデの賛歌

《真実な統治》

- 1 私は、恵みとさばきを歌いましょう。【主】よ。あなたに、ほめ歌を歌いましょう。
- 2 私は、全き道に心を留めます。いつ、あなたは私のところに来てくださいますか。私は、正しい心で、自分の家の中を歩みます。
- 3 私の目の前に卑しいことを置きません。私は曲がったわざを憎みます。それは私にまといつきません。
- 4 曲がった心は私から離れて行きます。私は悪を知ろうともしません。

《真実な侍臣^{としま}》

- 5 陰で自分の隣人をそしる者を、私は滅ぼします。高ぶる目と誇る心の者に、私は耐えられません。
- 6 私の目は、国の中の真実な人たちに注がれます。彼らが私とともに住むために。全き道を歩む者は、私に仕えます。
- 7 欺く者は、私の家の中には住みえず、偽りを語る者は、私の目の前に堅く立つことができません。
- 8 朝ごとに、私は国の中の悪者をことごとく滅ぼします。それは【主】の都から、不法を行う者をことごとく断ち切るためです。

詩篇 100 篇までを終えて一区切りとなりましたが、第四巻としては 106 篇まで続きます。本篇は、イスラエルの王がどういう政治を目指すかの決意表明の詩と言えるでしょう。正しく民を裁き、家庭内においても正しく歩もうとする王の自戒の念が込められています。読まれる状況としては、即位式における宣誓がふさわしいでしょう。

1～4 節では、王が自分に言い聞かせるように、神に対して真っ直ぐな生き方をしていこうと心に誓っています。肯定的なキーワードとしては「全き道」「正しい心」（2 節）、避けるべきあり方を表すキーワードとしては「卑しいこと」「曲がったわざ」「曲がった心」「悪」（3～4 節）が含まれています。権力を握った者は得てして高慢になり、国民の幸せを考えるのではなく私利私欲のためにそれを乱用する誘惑に晒されます。元々高い志を持って始めた仕事も、悪がしこい家臣の助言や、国家を超える圧力によって、瞬く間に顛落^{てんらく}するかもしれません。それは現代世界を見れば一目瞭然であり、主イエスの時代のユダヤ教最高議会にしても同様でした。本篇の作者がダビデであったとするならば（1 節）、彼は畏れをもってこの役職に就いていったことが窺えます。

1 節に「恵みとさばき」という重要な用語のペアが出てきます。「恵み」は神と民との契約関係を表すことばで、王が特に心を配るべきは、この契約の中間に立つ者としての責任を果たすことでした。恵みの神を代表する者として民を治めるのです。同時に、彼は民の一人でもありますから、水平な目線で民全体の幸福を祈り求めます。幸いなるかな、神を畏れる王が統治する国！

王としてもう一つ忘れてはならないことは、家庭をも正しく治めるということです。2 節で敢

えて「私は、正しい心で、自分の家の中を歩みます」ということが言われています。如何に外見は美しく飾っていても、家族を愛していないならば、王としての本質が問われることになるでしょう。そのようなほころびは政治にも現れてくる。上に立つ者の厳しさが問われるところです。

5～7節では、王が家臣に求める真実が述べられています。王に仕える者たちも、その歩みにおいて正しくあるべきなのは当然のことでしょう。王がとりわけ嫌うあり方として、「陰で自分の隣人をそしめる者」「高ぶる目と誇る心の者」（5節）、「欺く者」「偽りを語る者」（7節）というキーワードが出てきます。「陰口」「高慢」「欺き」「嘘」と言い換えてみてもよいでしょう。実際、利権を乱用し、国民を欺き、王の権力まで利用するような輩が世に蔓延っています。悪しきブレンによって、王の高い志が捻じ曲げられてしまうケースは少なくありません。

王としては、自分の得になることを求めるならば、悪い家臣の進言を聞き入れればよいのですが、彼はむしろ自分がそうならないようにと自戒しています。自分の目の向ける方向とは、「国の中の真実な人たち」（6節）だと。また、「全き道を歩む者」（6節）と共に政治を行おうと。

最後の8節は、「朝ごとに、私は国の中の悪者をことごとく滅ぼします。それは【主】の都から、不法を行う者をことごとく断ち切るためです」と締めくくられます。このことを実行するのが、現実には如何に難しいかを彼自身がよく自覚していたと思われる。実際、悪しき者こそが政治の実権を握っていることが多く、表舞台に立つ王や首相でさえ黒幕によって操られていることがほとんどだからです。結局は長いものに巻かれ、黒を白と呼ぶようになっていくのか。否！この王は、そのような悪の道を撥ね退け、自分が畏れるべきは神お一人であると高らかに宣言するのです。

「朝ごとに」というのは、当時の裁判が午前中に王の宮殿で行なわれていたという背景を表しているでしょう（エレミヤ 21:12、ゼパニヤ 3:5）。来る日も来る日も主に対して決意表明をし、「今日も正しい裁きを行なうことができますように」と祈る王の姿が浮かんできます。

私たちは「王」という身分を持つてはいないかもしれませんが。しかし、彼が多くの葛藤の中で主の御前に正しく生きようとした姿から学ばされるのではないのでしょうか。人の目を恐れるのではなく、主に対してどうであるかを自らに問う生き方を志し続けたい。自分の中にいる「悪者をことごとく滅ぼします」、「(私の心という)【主】の都から、不法を行う者をことごとく断ち切」りますと、毎朝のディボーションの中で祈って一日をスタートしたいと思います。